

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	文選の本朝文學に及ぼせる影響（承前）：論説
Author(s)	本田，弘
Citation	龍南會雜誌， 8 6： 1 - 1 2
Issue date	1901-06-18
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5175
Right	

龍南會雜誌第八拾六號

論 說

文選の本朝文學に及ぼせる影響(承前)

教 授 本 田 弘

卷九管家文章卷六に見出せり。孰れも文選を賞せざるなく、今又其句を摘記すれば、

○文粹九 北堂文選竟宴各詠_レ句得_下遠念_二賢士_一風_上詩序 菅三品

夫昭明太子之撰_二斯文_一也、駢_二七代之人英_一、披_二千載之鴻藻_一、東朝暇景所_レ攀者麗句之春華、五陽閑天、所_レ翫者清詞之夜月、遊_二目_一翰苑、援_二桃李_一、而_レ芟_二荊萊_一、栖_二心_一文林、呼_二孔翠_一、而_レ逐_二鸞雀_一、遂使_下詞賦箴頌_上、辨_二玉石於學山之阿_一、引序篇辭分_中涇渭於筆海之岸_上、取而集_レ之、名曰_二文選_一、誠是經_二國大業_一、化_レ俗之基者也、易曰、觀_二人文_一、以化_二成天下_一者斯文近_レ之矣、_下畧

○文章六 北堂文選竟宴各詠_二史句_一得_二垂月弄_一潺湲○

文選三十卷、 古詩一五言、 五言何秀句、

垂月弄_二潺湲_一、 半白行年老、 尙書庶務繁、

雖_レ思_レ樂_二風月_一、 不_レ放_レ到_二丘園_一、 非_二唯無_レ所_レ樂、

悠々有_レ所_レ煩、 水空觸_レ眼逝、 目睹_レ過頭奔、

惣爲^レ貪^ニ名利^一、

亦依^レ憂^ニ子孫^一、

此時玩^ニ斯集^一、

如[○]避[○]世[○]喧[○]喧[○]。

かの三船の遊に面目と施し、亞相公任卿の撰にかゝる倭漢朗詠集は、此頃大に弄ばれて、白氏文集と共に遠く徳川時代の文學にまで材料を與へたるものなれば必ず一顧せざるべからず。即一顧するに、撰は六十六代一條院の御宇と稱す。春夏秋冬雜の五類に分れ、詩文五百四十九章、和歌二百十六首。支那の作者は、楚の李斯齊の左大仲吳の陸士衡宋の張讀を除く外、重に唐代の人を取れり。引く所の書は史記、晉書、白氏文集、遊仙窟、凌雲集、扶桑集、本朝麗藻、都氏文集、田氏家集、樂府詩集、江談抄、菅家文章、菅家後集、本朝文粹、續本朝文粹及び文選等にて、此等引用書を認見するも、文選との關係親密なると明かなれども、例により和漢朗詠集註を本とし、語句の出でたる所を拾抄するに、

若菜、野中^{エラシデ}毫^ニ榮世事推^レ之[○]蕙心[○]、^{催^ニ粧序^一、菅家[○]章五、菅三品[○]文粹九}

蕙心とは女を云、文選に云、南國有佳人云蕙心と、文粹の願文には、蕙心春淺未及二八之齡とあり。

桃、^{桃始開詩序、紀納書[○]文粹十}桃李を美人の姿に譬ふるとは、文選に云、南國有佳人容良如桃李、註曰、越日南

國也、西施本越女。

雨、^{密雨散如糸序、或云[○]都在中}の下句、時舞鬢間暗動^ニ潘郎之思^一は、文選秋興賦より來れり。潘岳の鬢に白髮二節

生ひたるとをよめり。又文選廿九張景陽雜詩に、騰雲似^レ涌^ニ烟^一、密雨如^レ散^ニ絲^一。

躑躅山石榴艶似火、夜遊、人欲尋來把ラント——文選廿九古詩に云、晝短苦夜長、何不秉燭遊、

螢秋盤照レ帙賦、橘直幹、海賦篇中似宿流とある海賦は、海のとを作れる賦なり。木玄虚が作にて。文選十二

にありし。

早秋早秋答蘇六、白氏文集、不知秋送二毛一來は、前きの雨の條と同じく、潘安仁の年卅二にして鬢に二條の

白髮生ひしとを、文選秋興賦に書きたりしより、卅二を二毛の齡と云ふ由、文選註に見たり。

菊菊散一叢金、三善清行、陶家兒子不垂堂——文選陶潜が詩に、採菊東籬下と云へり。不垂堂とは文選二十三に、

家累千金坐不垂堂云々、蓋し陶潜在家には一叢の金あれば、其子息も堂に上りて危きわざをせずと也。

九月盡山寺惜秋序、源順、縦以三崙函爲固云々——文粹八の九月盡日於佛性院惜秋序より取れる句也。賈誼の

過秦論に云、秦孝公據崙函之固。

萩宵、曉露鹿鳴花始發。百般攀折一時情——これ新撰萬葉絶句の詩也。文選に以此花開一時百般

心逐とある語意なり。攀折は文集の字也。

蘭蘭氣入輕風、橘直幹、上句の曲驚とは琴に幽蘭の曲あり。文選雪賦の註にゆ、即ち楚謠以幽蘭ナラヘリ。

櫛衣櫛衣詩、後ノ中書工、庭香飛雙袖舉——文選櫛衣詩に、微芳起兩袖とあり。

爐火火是臘夫ノ春、管三品、看無野馬、聽無鷓、臘裏風光被火迎——文選卅謝玄暉詩に、風光草際浮、翰が註に

風本无光也、草上有光色、風吹動之、如風之有光云々。

霜寒露凝霜、晨積瓦溝、鴛變色、文選東都賦に、鴛瓦鱗翠虹梁疊壯。

四

曉曉賦、佳人盡飾於晨粧、魏宮鐘動云々、文選六左大仲魏都賦に、魏の宮殿の大なることを叙せり。

松河原院賦、(文粹第一) 九夏三伏暑、月竹含錯午之風、文選風賦に、眩々雷聲コトク、廻穴錯午、錯

午風とは涼風なり。

文詞付遺文、の冒頭に出てたる沈粹拂悅云々なる文選十七文賦(雁士衡)の句なり。

酒内宴詩序、(文粹十二)、菓ツミ、則上林苑之所、獻含自消、文選八に、上林苑賦司馬長卿有リ

山水史記李斯、泰山不讓土壤云々、文選三十九にもあり。只高が大、厭司馬長卿が擇となり又後の成の字就

の字になれり。

故宮河原院賦、(文粹一)、強吳滅分とあるは、文選に、吳強大なれども夫差以敗とあるより來れるか。

餞別 例の名高き後江相公の前途程遠馳思於雁山之暮雲、後會期遙霽、纓於鴻臚之曉淚、の雁山の二

字は、西京賦に、北方接雁門云々より出づ。都より胡の地に通ずる道に雁門とてあり。

老人命齒會詩、水無返夕、流年、淚、花豈重春、暮齒粧、上句は文選に逝者如流水云々、下句は時

無重至、花不再陽と云へる心なり。

述懷、翫其磧礫云々は文選五左大仲が吳都賦の文也。

要するに文選中の語句は、直接に間接に朗詠集中の選句となりて、我邦中世以來、上朝廷より下郷黨に至るまで、節をつけて誦はれたりと云ふべし。尙ほ和漢新朗詠集の參照を望む。

物盛なれば、必衰ふ。光孝以來藤氏の權日に盛んに、世襲の弊自ら始まり、人々學藝を以て競ふを得ず。加之寛平中留學生のとも止みしより、漢學次第に衰へ、文章は菅江二家の手に歸して薄弱の體となり、茲に四六文の本相を現はせり。拙堂文話に曰く、「延文之際宗室有兩中書王、廷臣有菅江諸公、我邦文章於斯爲盛然氣象稍不及於古」と。松崎君修も云、「本朝文粹ヲ見レバ六朝ノ四六ノ體中々ヤワラカナル書手アリ」と。(文會雜記)。されば菅江二家の文集は、四六文の絶頂にして、同時に傾衰の端落と見るべし。

堀河鳥羽崇徳の三朝に仕へて、學問該博、能文の譽ありし藤原敦光(大日本史第六十四本に載れり凡當時文章銘贊必使敦光草之とあり)の文章を、本朝續文粹に就て見るに、時に國文の語を交へて、古人の文に及ばざると遠し。源賴義大江匡房等の文章も此續文粹の中にあり。文粹と續文粹と比較すれば、其間の變遷歴然たり。文選の撰者藤原明衡が故らに書簡の法式として作れる雲州消息たる明衡往來を見るに、既に處々に罷、侍、令、給、などの和字を用ひて、後世書簡文の權輿をなせり。

かくて漢文纂る頃、一時百名爛熳の觀をなし、は和文なり。文選の影響は常に漢詩漢文の上に及びしのみならず。此等と和文の上にも及びたり。先づ貫之が古今文集並に大井川行幸和歌序、平兼盛が子日行幸奉和歌序、源順が庚申夜和歌序など所謂歌序を見るに、竹取伊勢等の純和文体とは痛く異りて、確に詩序の駢體を蹈襲せし形跡を存す。殊に古今集は、漢文の序先づ成りて後に之を翻譯せしものゝ如し、莊重なる中にも華麗を力め、語調齊一、文勢に昂低緩急ありて、恰も音律を具ふるが如き感なくんばあらず。而して爾來勅撰歌集の序には、常に此體を用ふることになりぬ。

物語文選に至りては、文体固より霄壤の差ありて、之はと思ふ節もあらねど、尙ほ文選中の語意を汲みし廉はあるべし。試に湖月抄及春曙抄に於て、文選に擬せし所を検するに、

源氏物語

帚木つながぬ舟のうきたるためしもげにあやなし—文選鵬鳥賦云、泛乎若不繫之舟、或は之を—本として、白氏文集の偶吟詩に、無情水任—方圓器—不繫隨—去往風—と云へるを取りて書ける

夕顔ゆづるいとつぎくしくうらあらして、ひあやうしといふく、あづかりがざうしのかた

の中方官—直符行—衛士—周廬擊—木柝—傳呼備—火、或云、文粹源順が文に、夜行翁夜之警—火舊府中—呼

火葵—若く盛りの子に遅れ奉りてもこよふことはぢなき給ふを—文選第十二郭璞江賦云、神蜃蜃蛤

以泛遊。

雨となり雲とやなりにけん、今はしらずと打ひとりぢて—これ文集の劉夢得が有所嗟—

雨と相失—雨乍—夢爲—雨爲—雲今不知とあるよりも出でたらんも、其夢得の詩が抑も

文選宋玉が高唐賦の序詞によりて成りしとを知らざるべからず。

賢本—しばし立とまりて白虹日を貫けり—史記並漢書の鄒陽傳の詞なるが、文選にも載れり。孰

神蜃れよか取れるにや。

須磨、風にあたりてはいづねねければ、文選に胡馬嘶^ニ北風^ニ、
 乙女、風の力けだしすくなしと打むし給ひて、文選四六^{（六臣説）}陸士衡が豪士、賦序に、落葉俟^ニ微
 聽^ニ以^ニ隕^ニ而風之力蓋寡。

眞木柱、かくる、までぞかへり見、文選別賦に視^ニ喬木於古里^ニと云へり。かの道眞の名歌「隠る
 、までにかへり見しはや」も、或は此別賦の脱胎にはあらざるか。

若菜下、天地をなびかし、琴賦に感^ニ天地^ニ以致^ニ和^ニ。かくかきりなきものにて、同賦に何變態之
 無窮。又た時ならぬ霜雪をふらせ、嘯賦の意を取れる也。

枕草紙

草の花は、萩はいどいろふかく枝^を。やかにさきたるが、文選西京賦に趾多とあり。

もりは、しやうぶこもなどの末みまかく見ぬしを、文選廿二、謝靈運、蘋萍泛沈深、蕪蒲冒淺清。
 風は、嵐のさど吹渡りてかほにしみたるこそいみじうおかしけれ、文選宋玉風賦云、其風中人狀
 直慄慄淋漂。又たたはき木もたふれ、全風賦に云、墜^ニ石伐^ニ木梢^ニ殺^ニ林莽^ニ。

雲は、朝にさる色とかや、全宗玉の賦に朝爲行雲、暮爲行雨などの意にや。

尚ほ枕草紙に「文は文集（白氏）文選はかせの申文」とあれば、文選の未だ世に重せられしこと明白
 なるも。枕草紙に似せてものせりてふ吉田の兼好の徒然草にも、其十三段目に「文は文選のあはれ
 なる卷に、白氏文粹、老子の言葉、南華の篇」とありて、世は荊菰のあやなきに、獨ともしびの下
 に、文選集などを弄び、浮世の無常を觀じたる法師の著述に、うも幾何の發見がある。

十四段、梁塵秘抄の郢曲の言葉ころ――郢は楚國の都也。文選に有歌_ニ於郢中_ニ者_ニ云々、これより歌曲を郢曲と云ふ。

廿一段、嵇康も山澤に遊びて魚鳥を觀れば心樂しといへり――文選四十三嵇康與_ニ山濤_ニ絶交書云、遊_ニ山澤_ニ觀_ニ魚鳥_ニ心甚樂_ニ之。

三十段、年月へても露忘るゝにはあらねどさる者は日々はうとしといへるとなれば――文選廿九古詩曰、去者日已疎、來者日已親。

三十八段はこれ兼好一世の本意也。陶淵明が歸去來辭に、以_レ心爲_ニ形役_一と云へるに同じ。害をかひ煩をまねくなかだちなり――文選には不_ニ懷_ニ寶_ニ以_レ買_レ害不_ニ飾_ニ表_ニ招_ニ累_ニとあり。金は山に棄て玉は淵になぐべし――東都賦に、捐_ニ金於山_ニ沈_ニ玉於淵_ニ。

四十一段、人木石にあらねば時にとりて物に感ずる事なきに非ず――鮑照が詩に人非_ニ木石_ニ豈無_レ感。

百四十五段、きはめて桃尻にて沛艾の馬を好みしかば――籍田賦に、龍驤騰驤して沛艾注に馬の行く貞とあり。

貳百十四段、晉の王儉云々――文選四十六王文憲が序とあるは此王儉のことなり。

徒然草と相對して鎌倉時代の名著たる長明の方丈記、こは余が最も愛讀する所なるが、其文章の井然たること四六体に稍近し。冒頭「行く川の流は絶えずして」の一段何等の妙文ぞや。しかも文選卷十六なる陸士衡の歎逝賦に、「悲哉川、闕_ニ水以_レ成_ニ川、水滔々而日廣、世闕_ニ人而_レ成_ニ世、人事々而行

暮、人何世而弗新、世何人三能故下暑」と云へるに類することの何ぞ甚しきや。源光行の海道記、全親行の東關紀行、共に亦四六体の亞流なり。

足利時代の謠曲に至つては、白民文集朗詠集、就中長恨歌琵琶行等の語句は、盛に挿入せらるるれども、文選中の秀句を取れることは至つて稀なり。蓋し謠曲の文選の句を含むは、朗詠より得來れるなるべし。直接に文選を引用したるには非るならん。さるにても大和田氏の謠曲通解を極めて手取早やにくり廣げしに、一の P.114 咸陽宮の曲ツレの語中に、其の磧礫に習つて玉淵を窺はざるは驪龍の蟠る所を知らず、とあるは、文選左太仲が吳都賦の句なり。田舎漢の心には、雲井の奥の測り難々、恐れて進みかねたる義也と云へり。三の P.116 天鼓の曲、地クリの詞にも同様の句あり。

五の P.104 大會曲の後シテ「それ山はちひさき土くれを生ずかるが故に高き事をなし海は細き流れをいとはず故に深き事を爲す」これ多くの書に引ける秀句なるが、余は寧ろ管子よりも文選李斯の上書に由れりと言はんとす。

四の P.89 木曾の曲、シテの中たとへば嬰兒の蠶を以て巨海を測り蟠螂が斧を以て隆車に向ふ如くなり―前句は漢書の句なるも、後句は文選に欲_下以_三蟠螂之斧_二禦_中隆車之隊_と云へるに出づ。而してこれも好んで吾人の用ふる秀句たり。

全しく四の P.81 松虫の曲、地の詞の内に「世は皆醉へりさらば我ひとり醒めもせで」とあるは、屈原漁父辭に衆人皆醉我獨醒とあるに出づ。

當時文辭の淵藪となれる五山の僧徒は、韓柳の文藻を愛し、(隆涼軒日錄文明十七年五月廿日ノ條、臥雲日件錄實

鑑三集四庫十六日法條、全七月十七日一條等例舉るに違はらず。ハしかも、一機軸を出して大に觀るべきものあり。(幹

枚胡盧集後序)師陳虎闕は四六文の弊害を論じて之を禁せんと欲し、(濟北集九答取丞相)、周鳳は其意の到らざるものあるを以て周鏡藏主を戒めたり。(日件錄、文安五二月、然ればにや義堂周信の空華全集永和四、十二月六日の條には、義堂か六臣註文選を京の管領武州太守に贈れる由見、其時の詩極めて宜し。曰く、

蕭統編成七代文、六臣競注漫紛紜

老僧不敢閑囊秘、馳獻明公一助策勛

即ち當時の學問は詩文本業に非らずして事業に應用せんと力めたること知るべし。金五年正月十四日の條には、黃梅使回、自京師云々管領武州余書及文選喜甚とあり。武州は細川賴之なり。文選を得て大に喜ぶ。賴之も亦篤學の士なる哉。

説

當時の二庫序金澤文庫及足利文庫には、固より文選の學もありしならん。余昨春四月の休暇に、金澤文庫の跡稱名寺を過ぎしに、其寶物の中に、文選の寫しを見たり。又皇典講究所講演第十四卷に、故内中村清矩翁は、足利學校の古書と云ふ題の下に、左の如く記せり。宋板文選六臣註六卷廿二冊、每卷首に金澤文章の朱印あり又未だ學校寄進永錄三年庚申六月七日平氏政朝臣とありて虎の印を捺したり又隅州の産九華行年六十一歳之時欲赴于郷里、過相州、大守氏康、氏政父子聽三畧、全講後話柄之次賜之、又請再住干講堂矣とあり其後に加墨點三要と見ゆ朱墨を以て點を加ふる事、この詳也かつ和訓を加ふ經籍訪古志に字書精嚴、鐫刻鮮明宋刻中尤精妙者と詳せり。

自下都高秀江戸人 寶暦元選の山吹日記に、足利學校の珍書を記せる中にも、同様の事實を述べたり。類はしければ省く。

慶元偃武の後は、醒窩羅山興りて、大に朱子學を唱導し、傍ら四六文の陋習を棄て、唐宋文に則ちんせしたれども、急に其格に入ることを能はず。仁齊父子も亦唐宋八家を本とし文章を書きつれど未だ平淡持陋の譏を免れず、徂徠に至り、八家を超えて李王の古文辭を修め、海内靡然として響應し、邦文始めて文章の格に入れりと云ふ。其門人服部南廓は、最も古文辭に長せし人也。しかも初稿の頃の文は、専ら文選によれりとぞ。文選をば能く讀みて、李善註をも書込みたる由なり。樂翁公の時、一方には栗山、精里、三洲の三博士出で、大に文法を精鍊し、文章を一定せしむも、一方にては尙ほ文選の會讀ありき。雲室隨筆、林家四世の學頭指臆君長先生の勉學を叙する條に、五月末頃文選會讀の日參りしに、朝四ツ時より始り、辨當を遣ふが休みにて、日の暮まで休みなし。燭を取頃、皆々後會を期して歸れり。

要するに、徳川時代一般の學者は、寧ろ文選をば度外視せし姿なるに係はらず、文選及古文眞寶文、体明辨等は、第一書肆に多く古本あるを認め、第二民間にも間々之を藏するものあり。第三世間の學者之を習讀し、或は之を品鑑することを好む者あり。第四坊間今猶文選字引と稱する字書あり。以て傳來以降千有餘年を経たる今日に至るまで、文選の命脉は綿々として絶えざるを知る。但し輒近の如く、諸科學の進みたる世の中に、復た延天の盛況を呈せんことを、吾人の夢想だに爲さざるべしなり。

終りに臨み附言す。世に風俗文選一名本朝文選と云ふものあり。五老井許六の選に係り、徳川時代の俳家芭蕉翁以下許六自らに至るまで、廿八人の俳文百餘篇を、辞、賦、譜、説、解、記、紀行、序、箴、銘、誄等の廿一類に分ち、本朝文粹と相對へて編輯したるものなり。去來が鼠賦の如きは、五音相通の假字をもて韻をふめり。此本朝文選の只我門の作者のみを撰みしに飽かずして、たとへば爛王の廳の貴賤なきがごと、遙に諸冊二尊の「あなうれし」の歌より當時までの俳諧者の書を集めたるものを本朝文鑑と云ふ。蓮二房の撰、享保三年の出版。總して俳人の文は、鎌倉時代の散文より得ること多く、從て文選の体を喜ぶに至れば自然なり (完)

故英國女皇ヴィクトリア陛下の偉業と

バルマーストーン卿の外交

(承前)

教授 長谷川 貞一郎

第一 バルマーストーン卿の經歷一般

バルマーストーン卿の呱呱の聲を擧げたるは、千七百八十四年(光格天皇の御代天明四年)にして、白玉樓中に去れるは、千八百六十五年(孝明天皇の御代慶應元年)十月十八日なり、若し其死去の二日遅れたりしなば、當に八十一回の誕辰を迎へたりしなり。卿は快刀亂麻を斷つかの手腕と、席暖なるに暇あらずの勤勉とを以て、銳意事に從へる英國有數の經世家にして、カンニングと友とし善く、卿の外交政策はカンニングと全然同一にして、氏よりも尙一步を進めたる者なり。天若しカンニングに假